

## NPO 法人ウッドデッキ第二回シンポジウム報告

NPO 法人ウッドデッキ第二回シンポジウム「未来の仕事 ― 秋田に学ぶ 過去～現在～未来 ―」は、2023年11月1日に秋田市にある国際教養大学コベルコホールを会場として現地参加とオンライン参加を使ったハイブリッド形式で開催された。現地会場で85名、オンライン視聴を含めた大学生など155名の参加があり、秋田の未来を担う、文化・芸術、森林、一次産業、ものづくりなど、様々な分野で活躍されている方々が登壇された。シンポジウムでは「不易流行」をテーマに、秋田から世界への挑戦について若者にむけたメッセージを発信し、さらに討議を行った。今回のシンポジウムは若い研究者・学生にも聴いてほしいという思いで企画され、学生の参加率は全体の25%と高い割合になった。

また、当日の午前中に現地参加の学生を対象に、シンポジウムに先立って対話型企画「先輩たちに自分たちの意見をぶつけてみよう」も開催された。自由な発言ができるようトークテーマを設けず、渡辺美代子代表理事、山極壽一氏（総合地球環境学研究所所長）、モンテ・カセム氏（国際教養大学理事長兼学長）の各先生方とお話する3グループに分かれて対話を行った。その対話の中で「秋田の発展に向けてどのような取り組みができるか」、「AIと人間の違い」、「科学と技術の定義」など、さまざまな話題が各グループで展開された。

午後のシンポジウムは、開会の挨拶として、同大のモンテ・カセム理事長兼学長が「怒りを希望に変えていく知恵を年長者は持つ。いろいろな場で世代間の橋渡しをし、平和な世界を築いていきたい」と述べられた。

続く基調講演では、秋田で制作した映画を地元で公開しながら地域文化振興を目指す「アウトクropp」の栗原エミル社長（国際教養大学卒業生）が「風土を醸す映像制作/地域に根ざした映画館運営」と題して、わくわくするものを映画化して、見えないものを見せるビジュアルストーリーテリングによる映画作りのお話をされた。その具体的内容は、大根の良さを知ってもらうため、いぶりがっこで有名な沼山大根の復活ドキュメンタリー作成など、価値の再発見にチャレンジするものであった。また、古民家を買って映画館とし、映画に関連する料理も提供して議論を深める取り組みも合わせて紹介された。

お二人目の基調講演は、スノーボード全日本選手権で優勝経験をもつ「Orbray（オーブレイ）」社並木里也子社長がお話をされた。並木社長は、国際教養大学コベルコホールに集まった若者向けに「『切る・削る・磨く』をコンセプトに自社のものづくりと地域の伝統工芸の技術を組み合わせて、歯切れよく、小学生から接する機会を持てば未来の技術者を育み地域も元気にできる」と語った。Orbray社は、並木里也子社長就任後、2023年1月1日にアダムンD並木精密宝石株式会社から改名した。宝石加工から始まった会社で、創業当初から革新的な技術で知られ、特に電気メーターの軸受宝石の製造から始まり、今では最新の精密部品のパイオニアとして知られている会社である。一方で、60年にも渡り、ダイヤモンドを用いて、レコード溝を最良の状態にトレースできるレコード針を世界の有名カートリッジメーカーに供給している。秋田県湯沢市に新本社及び新工場の建設を決定しているとのことだった。

基調講演のあとにパネル討論を行った。中央大学の高瀬堅吉教授がファシリテーターを務め、「あきた芸術村」（仙北市）に劇場を構える劇団「わらび座」の長瀬一男デジタルアートディレクター、秋田県立大学発農業ベンチャー「株式会社スターチテック」の取締役を務める生物生産科学科の藤田直子教授（植物生理研究室）、前述の総合地球環境学研究所山極壽一所長らにより、様々な観点で秋田から世界への挑戦についてディスカッションが展開された。パネルディスカッションのテーマは「秋田に学ぶ地域のこれから～不易流行をどのように未来につなげるのか～」であった。秋田は世界に先駆けて人口減・高齢化社会に突入しているが、自然環境、適度な人口密度が育む秋田の方たち特有の人格特性により、地縁・血縁がいまだに保たれて、古き良き日本の原風景がある。また、秋田の養育環境によるものなのか、若者の学力は高く、人財は豊富である。一方で働く場所が少なく、秋田の若手人財は他県に出ざるを得ない状況がある。その際、おおらかであるという秋田の人々の特性がネガティブに働き、積極的に行く場面ではアグレッシブに行くことができない。秋田の歴史を振り返ると、稲作が伝統産業となっているが、時代が変化するなかで、稲作はその適用を変化させ、維持・発展してきた歴史を持つ。変わる中で変わらないもの、稲作は人々の交流の中で支えられてきた。このような歴史・風土を持つ秋田において、日本全国から学生が集まり世界とつながる窓口となる国際教養大学が置かれ、人材育成が行われている。パネルディスカッションを通じて、秋田の

変わらないもの、これから変わっていくべきものを発信し、未来を担う若者たちに「不易流行」による未来創生を考えていただくことが、このパネルディスカッションの目的であった。ファシリテーターによるパネリストの紹介に応じて、各パネリストは自身の取り組みをそれぞれ紹介し、長瀬氏からは秋田の歴史・風土について述べていただいた。その後、伝統をデジタル化するという着想の狙い、課題を話された。藤田教授には外から見た秋田の特徴を述べていただき、伝統産物を刷新するという取り組みの狙い、課題を話していただいた。藤田教授は「米の需要は以前に比べて半分になっていて、今後需要が増えることは見込めない。そこに機能性を加え、食べるだけでなく、他のモノへ活用できるようにしていくことが必要」と、自分の専門分野を究めるとともに、新しいことに挑戦する大切さを伝えてくれた。これまで守り抜かれてきたものを変える試みについて、どのようなものが課題となりうるのか。そして、守らねばならないものとは何なのかについて、山極氏が俯瞰的な視座から考えを述べられた。パネルディスカッションの後半では、参加された学生からも意見をいただき、会場が一体となったディスカッションが展開された。

最後、渡辺美代子氏（NPO 法人ウッドデッキ代表）より「ウッドデッキは若い世代がやりたいことをのびのび出来るような環境づくりを目指している。秋田から海外へ！経験がないからこそ新しいことを受け入れられるので、ぜひ一度挑戦してみてほしい」と閉会挨拶があり、今回のシンポジウムは終了した。

開催後のアンケートでは、「大変よかった」が 49%、「よかった」が 47%、「やや物足りなかった」が 2%、「物足りなかった」が 1%、という結果であった。また、シンポジウムを終えて、参加した学生より「昨今のデジタル化について、単なる効率化と捉えるのではなく、それをどう活かしていくかを考えたい」、「秋田は、（最新技術や流行などが）外から流れ込んでくるイメージだったので、そこに積極的に絡んでいくべきだと感じた」、「わらび座の取り組みについて、デジタル化を活かして、伝統芸能の新しい表現ができると思った」などの感想が寄せられた。

開会の挨拶：モンテ・カセム先生



栗原エミルさん



並木里也子さん



渡辺美代子代表理事



## パネル討論の様子



写真はすべて秋田県立大学ホームページより転載  
<https://www.akita-pu.ac.jp/oshirase/oshirase2023/8156>